

會



報

1961年6月

215

日本山岳会



大阪市大マーク

ランタン・リルン

森本隊長通信

(遺稿)

△その一▽
カトマンズにて

おかげさまで明日、一二五名でキャラバンに出発できることになりました。一度は払わねばならぬ月謝でしょうが、全くウンザリする仕事ばかりで参りました。

先日、ドクター・ハーゲン夫妻をお訪ねしていろいろ良い話を聞かせて貰いました。

岳連隊は4〜5日おくれます。篠田先生を今朝、空港へお送りしました。神原氏は四月二日に発つて帰られるそうです。

今後共よろしくお願いします。
(三、二九、日高会長あて)

△その二▽

B・Cにて

JAC関係の皆様方にも、すっ

かりごぶさたしています。おかげさまで三月三十日、カトマンズ発、四月八日、リルン氷河右岸のモレインの外側にBC(四〇〇〇m)を設け、十三日にCI(アイスフール取付点四二五〇m)、十六日CII(五〇七〇m下部氷河中央)十九日CIII(五六〇〇m上部氷河)を設け、その後CIV(六〇〇〇m)、CV(六四五〇m)の位置を決定して、四月二十四日、全員BCへ引上げました。

三日休んで、明日から登頂態勢に入ります。

想像した通り、このアイスフールは悪く、四三〇〇〜六五〇〇mの間、距離は短い傾斜がきつく変化が大きい。ため、テント場も限定され、また氷雪崩セラックスの崩壊、クレパスの変化等々実にめまぐるしく、折角張ったフィックスも二、三日でルートを変えねばならず、幸い氷はそう固くありませんが厄介な水仕事もかなりあります。C1〜C3間にすでにフィックス六〇〇m使いました。六四五〇m(C5)の地点でやっと主稜線へ取付くわけですが、頂上(七二四五m)までかなりの高度差があり、傾斜はたいしてきつくないが、平坦でない馬の背に近い稜線をいかにしてこなすか、あとはやってみるしかありません。

幸いシエルバはギャルツェンのよりぬきのダージリン勢で、ことにパ・ノルブとミンマ・ツェリンはフランス隊のマカルーとジャヌーで水仕事ばかりやってきたせい、なかなかたしかな腕で大助かりです。

ギャルツェンも悪ければ悪いほど「ティルマンやランベールがむずかしい」といったんだから」といってファイトをもやすので面白いです。

予定よりもキャンプが一つ増え、なにかとやりくりしています。が、一同大いに元気でます。来月はじめ二隊二名ずつのアタックを出す予定です。うまくゆけば新聞に小さく出るでしょう。

何れにせよ、隊員一同、人間的に良い勉強をさせてもらっています。会長、副会長、村木氏はじめ皆様によりしくお伝え下さい。
(六一、四、二七・金坂一郎あて)

大阪市立大学ヒマラヤ遠征隊の遺難

三月十日、カトマンズを出発、ランタン・リルン(七、二四五メートル)に入山中の、大阪市立大ヒマラヤ遠征隊が、五月十一日未明、ナダレのため遭難した報せは同十九日夕、本会に届いた。

隊員氏名つぎの通り

◇隊長、森本嘉一(四二)、同大OB本会関西支部委員

◇隊員 広谷光一郎(二八)マ大島健司(二六)マ藤本勇(二五)

マ近藤哲也(二四)マ伴明(二一)

(以上いずれも本会会員)

◇シエルバ(5名)

マギャルツェン・ノルブ(四三)

マラクパ・ツェリンマアングワIV

マパ・ノルブマミンマ・ツェリン

× ×

本会では、遭難の第一報に接しとりあえず、別記の弔電を、①大阪市立大本部あて、②現地キャンプあて、③テンジン組合長あて、④ギャルツェン未亡人あてに、それぞれ打電した、⑤は返電。

つづいて二十日(土)打合せのため上京されたOB泉隆次郎氏を本会ルームに迎え、日高会長、三田副会長らが同氏より事情を聞き、今後の措置についてアドヴァ

イスした。
また、朝日新聞社 秋岡ニュー
デリー支局長、ニューデリー大使
館松田書記官は、前後処置のため
カトマンズにおもむき、OB泉隆
次郎氏も二十四日、羽田発現地へ
出発、本会は同氏に香華料を託し
た。

五月二十六日着信（本会あて）

現地遭難報告

大阪市立大学

ヒマラヤ遠征隊

副隊長 広谷光一郎

大阪市立大学ヒマラヤ遠征隊長森
本嘉一氏に代り副隊長広谷光一郎
が以下の連絡をさせていたよきま
す。

突然の出来事で何をすすべも知
らず取忙ぎ当日の記録のみ御連絡
申し上げます。

過日隊長よりランタン・リルンの
登攀第一期の様子を御連絡申し上
げたと存じますが、第一期は好天
に恵まれ四月十三日～四月二十三
日の間にCⅠ(四二〇〇m)、CⅡ
(五〇七〇m)、CⅢ(五六〇〇m)、
CⅣ(六〇〇〇m)、CⅤ予定地
(六五〇〇m)の設営に良好な結
果を得ました。
以後第二期に備えてB・Cに下山

待機しましたものゝ、連日の悪天
候でその後四月二十五日～五月七
日迄B・Cに停滞いたしておりま
した。やっと天候の回復を見た五
月八日に第二期の行動を起しまし
た。

五月八日、B・C—CⅡ、森
本隊長以下五名、シェルパ、
ガルツェン・ノルブ以下四名
尚ローカルポーター五名(ろ
ち一名ポストランナーとして
下山中)リエゾンオフィサー
一名はB・Cに留る。

五月九日 悪天候の為沈滞

五月十日 CⅡ—CⅢ

五月十一日 未明事故発生

CⅢ(リルン氷河上部)は大雪原
の南端に位置し、私達十一名は三
つのテントに別れて暮営しており
ましたが、五月十一日未明四時四
十五分頃、ランタン・リルンIIキ
ムシュン釣尾根上部の大アイスピ
ルディングの崩壊による大雪崩を
受けて全員流されました。

内隊員三名、シェルパ二名は約五
十米流され雪面に放り出されまし
たが、他は約百米下部にあるクレ
バス中に落下、隊員一名シェルパ
二名はその難を免かれましたが、
隊長森本嘉一及び隊員大島健司は
行方不明、サーダーのガルツェン
・ノルブはクレバスへの落下によ
る打撲及び埋没により窒息死亡致

しました。

尚生存隊員及びシェルパにより行
方不明隊員二名の捜査に従事しま
したものの、アイスブロック固化
し、ピッケル、シャベル等器具紛
失の為、捜査困難を極め、全員は
極度に疲労、精神の混乱のため、
供葉、朝食、分散せる装備、遺品
その他を収集しておりました所、
再度雪崩発生(九時二十分)多大
の危機にさらされた為、直ちに下
山決定。ほとんどの装備、食糧を
放棄し、CⅡに

Gyaltzen
ཀཧཱ་ལཏེན་

放棄し、CⅡに
下り、五月十二
日生存隊員、シ
エルパ一同無事
B・Cに到着致
しました。
以上簡単乍ら事
故発生の様様を
御知らせ致しま

した。
ぶしつけ乍ら、この様な大事故を
発生せしめましたことを遺憾に思
うと共に、貴会に対し多大の御迷
惑をおかけ致しますことを深謝致
す次第であります。
尚帰国の際は詳細にわたり御報告
致しますれば、先ずは取忙ぎ御連
絡申し上げます。

五月十三日
ランタン・リルンBCにて

<別紙>

電・返

① 大阪市立大学ヒマラヤ遠征委員
会 委員長 福井孝治殿
遭難の悲報に接し哀愴の念に堪えず
謹んでお見舞申し上げます。

日本山岳会

② Japanese Langtang Expedition
悲しみの知らせに 接し 心から
おくやみ 申しあげます。どうぞ
お心おとし ないよう。

日本山岳会

③ Tenzing Norgay President
Sherpa Climbers Association
Very Sorry Learn Death of Gyal-
tsen Norbu Member of Your
Association. Please Accept Our
Deepest Sympathy.

Japanese Alpine Club

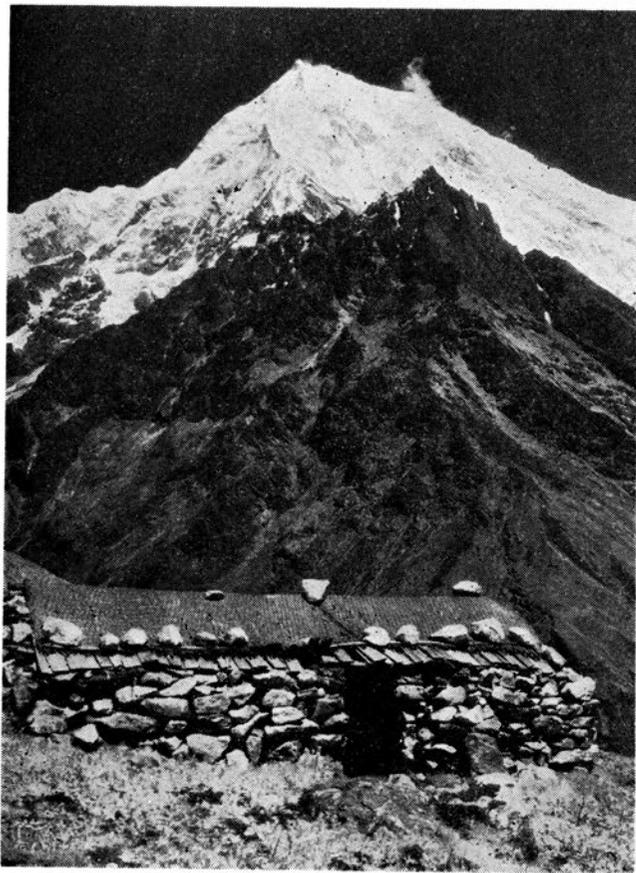
④ Mrs Gyaltzen Norbu
Deeply Grieved at Sad News
Death of Gyaltzen Norbu Sherpa

Our Trusted Faithful Friend.
May God Comfort You.

Japanese Alpine Club

⑤ ギャンシン・テンジン両氏より
返電の
President Japanese Alpine Club
Our Deep Sympathies to You Next
of Kin Sponsors on Sad Death of
Japanese Climber Gyansingh and
Tenzing.

<カウト説明> ギヤルツェン・ノルブの手蹟は、1956年9月
来日のときのもの。(折井健一氏蔵)



—— ランタン・リルン ——

1958年6月4日(午前8時) 風見武秀

ギャルツェン・ノルプの思い出

細川沙多子

ランタン・リルンの頂上攻撃を目前にして森本隊長ら三人遭難の悲報をきき、クレパスの中にテントと共にふっとばされて動かなくなっている彼の姿はどうしても信じられない。

初対面から、にこやかに人なつこい笑顔で敏捷に動き廻っていた彼。去年の秋、ギャルツェン・ノルプとその娘、ニマ・ラモと行を共にした私たちデオ・チバ山行の三ヶ月に亘る思い出は余りに多く、新しく胸をしめつける。幸にも私たちはデオ・チバ峯の頂をふむ事が出来たその成功の蔭にあるギャルツェン初めシエルパ達の献身的な協力を私たちは感謝と共に忘れる事は出来ない。登頂終えたあと「チャン」を飲

んで愉快なシエルパ・ダンスをやったり、彼のすばらしい過去の山々の話を聞いたベース・キャンプの夜。彼は話上手だった。娘ニマ・ラモにとっては最後の父娘山行となつて了つたが、うれしそうにお父さんのそばを登つていた。むづかしい岩場に来ると父ギャルツェンは一つ一つ手を、足を動かして三点確保を教えていた姿もあった。マンデイ(地名)の奥地にある

聖グルナナの池やラマの寺、それからダラム・サラに亡命中のダライ・ラマとの会見の時のけいけんな信仰の姿、書くほどに思い出し悲しみはふかい。ヒマラヤ遠征にまたとない良い友人ギャルツェン・ノルプは静かに雪に眠る。

唯、ふかく冥福を祈るばかりである。(六一、五、二一)

▲筆者はパンジャブ・ヒマラヤ遠征隊長▼

写真に寄せて

……ガンジャ峠を越えて下つて行くと美しいカルカ(牧場小屋)のある草原に出た。

ランタン・リルンが、すぐ目の前に、谷をへだてて、そびえ立ち見事だ。

花のある台地(四、一〇〇メートル)は、いかにものびのびとして、氷壁とのコントラストがなんとも言えない。

前衛峯の黒い山のかげ、右側にランタン氷河がある。

(風見武秀)

本号主要目次

- 大阪市大遠征隊の遭難……………一
- ギャルツェンの思い出……………三
- 志村さんの味……………四・五
- ヒマラヤ遠征の費用と調達……………四・五
- 第二次登山技術指導者講習会……………六・七
- ◇ 会員通信……………八・九
- ビッグホワイトピーク便り……………八
- ◇ 図書紹介……………二〇・二一
- ◇ 会務報告……………三
- 一九六一年度通常総会……………三
- ◇ 支部便り……………四
- 東京支部総会報告……………四
- 東海支部設立報告並規約……………五
- 青森岳連雪上技術講習会……………六
- 信濃支部登山基礎技術講習会……………六
- 宮城・石川支部報告……………七
- 第十五回ウェストン祭……………七
- ◇ 会員の声……………八
- アンデス通信(一)……………九

ギャルツェンの遺族のための募金発表の際はご協力下さい。

◇ * 大阪市大遠征隊は、五月二十四日夕刻予定通りカトマンズに着いた。

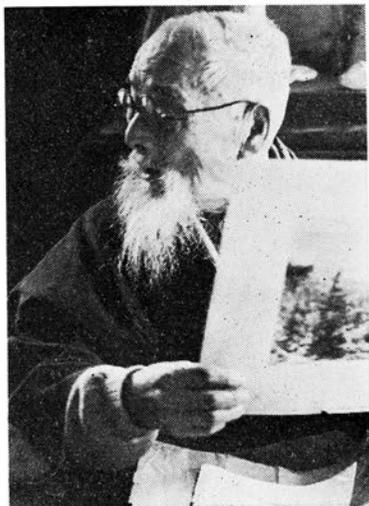
◇ * 六月六日、大阪市大遠征隊広谷副隊長、同OB泉隆次郎の両氏は羽田着帰国し、七日午前十一時、日高会長その他が、両氏より帰国のあいさつを受けた。
* 六月十七日、午後三時ルームに於て、今回の事故の詳細な報告が行なわれた。

志村さんの味

高野鷹蔵

志村寛（鳥嶺）君が逝去されたと言う手紙を会報編集者からもらって始めて私は知ったほど晩年はあまり交渉がなかったのである。氏と知り合ったのは勿論、山岳会が創立される前後、高頭さんを通しての知己である。

はじめて会ったのは長野市の中学校に奉職されてるころ、私が長野市狐池と言う善光寺近くの御宅にお訪ねしたのが最初であった。多分これははじめて高頭さんの御宅（新潟県米迎寺の）に伺ったときの旅の途中であったと思う。



志村鳥嶺氏

1956年12月撮影 「岳人」社提供

高頭さんはよく「わしの家に来るなら冬の雪の時に」と言っていたから、勿論冬の寒い時で、長野の街が東西と南北の街並で、道路の凍てつきようが反対であったことを覚えている。

初めのうちは、小島（久太）さんの「鳥水」と志村君の「鳥嶺」と何か因縁でもあるのかと思っていたが、小島さんのは衆知の如く「鶴の真似をする鳥、水に溺る」であり、志村さんのは、野州鳥山の生れだそうである。

なんでも、師範学校出の人で、独学検定で中学教員になられた努力型の人で、そのころ植物や動物などの中学の先生と言えば、殆んどがこうした努力型の人達であった。

山登りも、こうした植物採集が動機であったわけで、それに当時あまり行われなかった写真を写すことを併せやっていたので、吾邦山岳写真のパイオニアと言うことになる。「山岳」創刊号（第一年、第一号）には志村さんの写真（白馬山腹の大雪渓、他一枚）が載っているのもわかる。その後大きな山岳写真集も刊行されている。

五年前の三十一年の押し迫ったころに、「岳人」社から、志村君を中心にして、昔の山岳写真の座談会をやりたいから来てくれと、高須茂氏から持ち込まれたが、恰度、私はその少し前に大病をやって、やっと退院してきたばかりだから御免を蒙りたいとお断りをしたが、志村君に対応する昔の山の写真家がないからと言うので、それなら私の家に来るならお目にかかるということになり、とうとう私の家で、志村君と私を中心に、山岳写真家の錚々たる風見武秀、船越好文、岩科小一郎の諸君の新

ヒマラヤ遠征の費用とその調達

☆

(1961年3月21日付フィナンシャル・タイムズ記事要約)

海外登山隊の経費とその調達はわが国でも関係者の頭を悩ます重大問題であるが、本家すじの英国ではどうか。今年のスプツェ遠征隊に関する英紙の記事は参考になると思われるので、その要領をぬき出して見よう。

海外遠征費の問題はいつもオーガナイザー頭痛のたねだ。出来るだけ経費を切りつめたあけく所要額を工面しなければならぬ。登山は見物人から金を集めることが出来ぬスポーツに属しているからだ。そこで遠征計画が参加者のポケットからはみ出す時が来るのは避けられない。今度のは遠征の規模から見ると費用は決して多くない。九名の隊でカトマンズから二十一日間歩いたのち、二万五千呎以上の地点に八のキャンプを設け、そのうち数

名は相当期間じつくりと高所に止まっていなければならぬのである。経費の総額は四二九五磅、一人当たり五〇〇磅たらずになる。その内訳は左の通りだが、装備や食料をただで或は割引して呉れた商社のお蔭で大いに節約出来た。

輸送	一八八五磅
労務	九〇〇
装備	四〇〇
酸素	五五
食料	三七〇
保険	二四〇
税(ネパール)	一五〇
通信とポスト・ランナー	四〇
印度及ネパールに於ける雑費	二五五
合計	四二九五

最大の項目は輸送費だ。普通の船便でボンベイまで行くと二四〇〇磅かかるのだが、スタンダード・トライアンフ社が自動車を二台貸してくれたので、五名は五〇〇磅あまりのガソリン代だけでカトマンズまで飛ばすことが出来る。三名は空路で八五〇磅、その他は海路ついで陸路で運ばれる荷物の運賃だ。一名が荷物を率領して同行する。食料費は詳細な日程表によってきめられ、延べ一六五〇名分であ

旧山の写真家が大きい昔を語り、今を話した。(十二月十六日)

× その時、風見さんは昔の人は、よく「レンズの味」と言うと、大いに昔者を囁かれたが、志村君は大きいそれに反論、力説して止まなかった。私は志村君より少し若い、それでも既に、そのとき七十を越していたし「レンズの味」党である。

志村君にしる私にしる、当初の山の写真は、暗箱と言ひ、三脚と言ひ、組立て式のものをつぎ上げたもので、今日の如きハンドカメラなどはなかった時代であるから、普通には硝子の乾板で、大きさもカビネ判くらいであるから、レンズの焦点も小型カメラや、シネ版の如く深いわけがない。従ってそれに「レンズの味」なるものが湧いて出る。

× 志村君の愛用レンズは確か「ダゴール」であり、私は「テッサ」であったから、志村君の写真は堅い写真が多かったわけである。おそらくこの「山岳写真に於けるレンズの味」は、これから先きは、知っている人はないであろう。志村君の思い出の一つでもある。

志村君が長野の中学にいたころには、長野県の教育家での登山家は、河野齡藏、矢沢米三郎の両氏が先登であり、そのころの長野県内には「他府県のもの」と言う意味の言葉がよく使われたもので、志村君は野州(栃木)の人間でありながら長野県の山を荒らし回るといふわけか、大分その辺の人たちからは、睨まれていたとかの噂話があった。それからあらぬか、後に台湾の台中辺の中学校に転任された。

× 幾年か後に東京に帰って来られ、目黒に住まれたころには、日本山岳会の仕事をされたこともあるが、そのころには私とは殆んど交渉もなく過ぎており、前記の如く、五年前にお会いしたのが最終であった。

× 志村さんと高頭さんのつながりは、吾々と高頭さんの山岳会つながりより古いのであろう。高頭さんも既に亡い今日、また、志村さんの昔を語る人は多分あるまい。

× 五年前に私の家に来られた時の風車(ふうぼろ)は、やはり以前学校の先生時代の様子、たまたまいと全く変わっていない。失敬な文

字だが、田舎教師の登山家と言う「味」がした。やはり、レンズの「味」と一味あい通ずるものか。(六一、四、六)

▽ 志村鳥嶺氏の著書

志村鳥嶺氏のごときは、会報一九七号(三十三年五月号)および一九八号(同六月号)の、故伊藤隼氏の「志村鳥嶺翁」という記事に詳しい。

志村氏は明治七年二月五日、栃木県鳥山町の旧鳥山藩士の家に生れた。明治二十五年日光白根山に登つてから、八十三才に白馬岳に十三回目の登山をした。(昭和三十一年八月十五日)

著書に、●ヤマ(前田曙山合著 明治四十年)、●高山植物採集及培養法(明治四十二年)、●千山万岳(高山房、大正二年、ウエストンの序あり)、●山岳美観(成美堂、明治四十二年、初期山岳写真集として著名、稀観書)などがある。以上、会員小林義正氏の示教による。(F)



ウツクサ

る(自動車隊往復五週間、全隊員とシェルパ六名、リエゾン・オフィサー一名のカトマンズ・ベール・スキャンピング四週間と、山中で七週間―五月下旬登頂の予定)。英国商社で食料を寄附したものの三十一社、割引したもの十四社。隊員用主食は安価なものを選んだが、一日平均三九一〇カロリーを確保した。しかし単調を破るためと高所用(隊員が必要とする食物や飲料をとる気を起させるのが重要な心理的問題になる)として、右の外により高価な食料を持参する必要があった。

装備の問題はもっと厄介だ。と云うのはプリムス・ストゥヴ、テント、ロープなど特殊品のメーカーは、かれらの商売上の常得意であるこれらの登山家たちに商品を寄贈することを喜ばないのは自然の理だから。しかし体面上と好意とから割引してくれたことも屢々ある。シャツ、靴下、靴墨、石鹼など、それほど利害関係が大きくない店はもっと勉強してくれた。

フランスでは登山やウインタースポーツ用具には広くて裕福なマーケットがあり、立派な刊行物もあるのだが、英国では登山遠征隊を利用して消費者に広告することは重要視されないことが多い(時計

は例外。此の方面でさらに努力の余地があることは確かだ。

こんな援助があってもまだ経費は隊員だけでは賄い切れない。九名の隊員で一三〇〇磅を分担し、講演会とベール・スキャンピングからハガキを送る仕組み(切手収集家に評判がよかった)とで二五〇磅を集め、それでも足りぬ二七四五磅は新聞社との契約とマンチェスターのギンネス・パブロー・アンド・ジョーンズ、ルックサク・クラブ及びマウント・エヴェレスト財団(一九五三年エヴェレスト遠征の著書や映画の収入をもとにして設立され、毎年本件のような遠征に補助金を出している)からの補助金で埋めることとなっている。

遠征隊が英国を立つときまでにこの予算は充分カバーされておらず、さき見込みはいっこう確かでもない。しかしなお別途収入の可能性はある。これは登山記の内容や、グラナダTV提供の映画フィルム の出来栄え如何にかかるとある。

(三六、四、七) (日高記)
ヌブツェに初登頂

ヌブツェ(七八三三米)を攻撃していたイギリス隊(ジョー・ウォルムスレー隊長)は六月十六日登頂に成功した。(カトマンズ二十三日発ロイター)

第二次登山技術指導者講習会

日本山岳会

趣旨及目的

本講習会は指導者の講習会であり、全般的な技術の向上を目的とするものであるが、わずか一週間という日時ではおぼろぎの技術講習になってしまふおそれがある。それで今回の講習会ではもちろん全般的な登山技術も行なうがとくに一つの技術に重点をおいて、その技術の理論と訓練を徹底的に行なうことにした。今回の講習会では特に「確保」の問題をとりあげることにした。

特定の技術に重点をおいて行なうこととした理由は、全般的な技術すべてを行なうには日時が少ないうことと、もう一つ大きな理由は本講習会に参加する講習生は各地方へ帰り、伝達講習をするものと思われるし、また所属する山岳会で指導する場合、特定の技術訓練をはじめからマスターしておくことはその他のどんな技術を指導する場合でもきわめて大事なことで考えられるからである。

つきに特定の技術に「確保」の問題をえらんだことであるが、これは「確保」ということがわりあい大きくとりあげられている反面、実地に訓練することが少なく理論のみに走る傾向が多分にみられるからである。また確保に或る程度自信を持ってないと連続登攀の場合などかえって危険性を増すことにもなるからである。

また今回の講習に参加する講習生はいずれも各地方における中堅もしくは上級の登山者であり、指導する立場にある人達である。したがって技術講習といつても、講習生だけを対象とせず講習生を通じて一般登山者に通ずるものであるから、教え方、訓練の方法というところを常に念願にしてやってみてほしい。

参加府県・受講者氏名

静岡(佐野 仁、生井伯典)、石川(上田鉄一、森孝雄)、奈良(松本 国男、藤井利一)、滋賀(吉田孝、石井出 澄、和歌山(藪田武人、東条純一)、兵庫(山本義弘、定行吉信、富山(井上晃、山口得美) 福井(高村利幸、中村幸一)、大野(高山京二、相馬慶造)、長野(井口謙司、瀬戸堯徳)、山梨(浅川瑞穂、斉藤実)、京都(堀田真一、西根栄次)、三重(栗本克行、水谷親稔)、松本自衛隊(神村、中野、若浦三隊長)

編 成

本部 チーフ・リーダー 三田 幸夫
サブ・リーダー 日下田 実

サブ・リーダー 高橋 進
マネージャー 川上 隆
サブ・マネージャー 山野井武夫
ドクター 田村 扇一
講師 日高信六郎、高山忠四朗
浜野正男、加藤泰安、折元秀穂
A班別編成、並担当講師名V
Aグループ
○片桐理一郎(大阪)、酒井敏明(山梨)、長尾悌夫(三重)、田中敏男(奈良)、竹田寛次(京都)
Bグループ
○相沢裕文(長野)、西川益男(滋賀)、菊島芳彦(和歌山)、熊谷義信(福井)、年森靖(兵庫)
Cグループ
○芳賀孝郎、大鷲正芳(静岡)、阿部盛明(石川)、東真人(富山)
注○印はグループ・リーダー
連絡員 小里頼忠、中野和郎、百瀬寿雄

以上、本部および講師二十五名
受講生二十六名、松本自衛隊員三名、連絡員三名、計五十七名。

装備、食糧、その他

○共同装備(各府県単位で準備)
ロープ40m一本(30mで可、太さ11mm以上)、三ツ道具一式(アイズピトン一、ロックピトン、タテヨコ各三、カラビナ三、ハンマー二)、炊事用具及び食器一式(三人分)、石油コンロ(三人分の炊事可能なもの、燃料(石油)は委員会にて用意する。グラランドシート一枚)
○個人装備
雪中幕営できる冬山装備一式(寝袋、マットを含む。但しテントは不用)、山スキー用具一式(競技用スキー靴及びランググリーメンは不可)、シール、食糧(一般食糧は委員会にて用意するが非常用食糧は各自二食分携行のこと) 細引。

行 動 概 要

三月十八日、浅間温泉(湯ホテル)において講師打合せ。
三月十九日、開講式並に準備会(於浅間温泉(湯ホテル)) 挨拶(日本山岳会長日高信六郎、講習会の主旨説明、三田チーフ・リーダー、登山に於けるリーダーシップについて、浜野講師、隊編成ほか諸注意事項、日下田サブ・リーダー)。
三月二十日(曇) ホテルより自衛隊トラックにて沢渡着(七、三〇一〇、〇〇) 徒歩、坂巻温泉にて昼食、上高地村管ホテル着(一四、五六)

三月二十一日(晴) ホテル発(六、五〇) 西穂山荘(九、五二) 昼食後、小屋裏、飛騨側斜面にてキック・ステップとアイゼンの練習(日下田SLほか各講師担当) テントについて説明(竹田講師)、設営、Aグループテント泊(一四、二〇一五、一〇) 夕食後講義と討論、確保及び登山技術一般について(日下田SL担当) (一八、〇〇一、〇〇)

三月二十二日(晴) 山荘発(七、三五) ゲレンデにて滑落停止、制動確保、コンテナアスの場合の確保の訓練(七、五〇一五、三〇) 夕食後講義、冬山の危険(加藤泰安講師) 海外登山について(三田チーフ・リーダー)
三月二十三日(曇後雪) 山荘より各グループごとに西穂高岳に登頂(七、三〇一、一〇) 昼食後各グループごとに山荘にてミーティング、夕食後講義、冬山装備について(片桐講師) (一八、〇〇一、三〇)

三月二十四日(晴) 山荘発(八、〇〇) 上高地村管ホテル着(九、四五) 昼食後、遭難対策について討論(折元講師) (二二、〇〇一、一六、〇〇) 夕食後、反省会(司会、日下田実) (一八、三〇一、〇〇)
三月二十五日(晴) ホテル発(八、〇〇) 沢渡着(一一、四五) 閉講式(講師、日下田サブ・リーダー、折元講師) (一三、〇五一一、三〇) 自衛隊トラックにて松本駅前解散。

講師感想

熊谷義信

中部日本という、登山をするには地域的に恵まれた各府県からの集まりだけに、実際的にはかなり高度の山登りを体験している人達が集まっています。特にその割に内的なもので程度の低いものを感じました。特に生活技術、討論(話し合い)の技術等にそれを感じました。技術的には高度な訓練を受けてはいるのでしようが、精神的な面での訓練というか、きびしさというか、そういうものの体験がないことを感じます。

講評

—感想をも含めて—

日下田 実

今次講習会に参加した受講者諸

兄の登山技術は大体出来ていると
いってよいと思う。しかし各講師
が指摘しているように、それらの
技術を完全にこなしているか、ま
た十分身につけているかというこ
とになると、まだ十分ではないと
思われる。講習会で行なう技術
(雪上の歩き方、ロープの扱い方、
特にとりあげた「確保」の問題
等)はきわめて一般的、また基礎
的なことであって、冬山をやって
いる人たちが、これらの基礎技術
をこなすことができるのは当然の
ことなのだ。いちばん大切なこと
は冬山の基礎技術を確実に身につ
け、いつ如何なる場所、どんな条
件のもとでも、確実に処理できる
ようにしておかなければならない
ことである。こういう点からみれ
ば、まだまだ基礎的な訓練が十分
であるとは思われないし、リーダー
として初心者に登山技術を教え
込むための努力が十分であるとは
考えられない。

閉講式のときに申上げたよう
に、基礎技術の習得には、きびし
い訓練以外にないと私は考える。
初心者とか、自分より劣る者には
きびしすぎるくらい厳しくやって

もよいのではなからうか。

それと同時にリーダー、中堅級
の人たちは、自分自身に対しても
きびしさを失なってはならない。

これは至極当然のことであるが、
ある程度歩けるようになると「我
事成れり」とごばかり、はるか彼方
のことばかり気にして、肝心の足
もとを見ない人たちが案外多いよ
うに思えてならない。

特に最近のように登山技術が進
歩し、いままでも登攀不能と考えら
れていた箇所さえも登られるよう
になると、基礎技術の重要さはま
すます増大してくるのだ。それだ
けに、リーダー級である、また
中堅級であることを問わず、ひとし
く基礎技術に対する精進は怠って
はならないし、初心者に対しても
基礎技術の重要さを徹底的に教え
込まねばなるまい。基礎技術に対
する精進がないかぎり、いかに素
晴らしい登攀がなされようとも、
それは単に冒険を行なったものと
しか考えられないであろう。

つぎに、この講習会に於て基礎
技術の習得には、きびしく徹底的
にやらなければならないと私も講
師も何度か言った、—そのこと
は、肉体的にきつく、徹底的にし
ほってやることは、まったく違
うことだということをよく考えて
いただきたい。

肉体的にきつくやることはきわ
めて簡単なことだ。ものを教える
のに、しぼりあげて教え込むのは
教える側にとってはきわめて楽な
方法だと思ふ。このような方法は
短時間のうちに、インスタントな

効果をあげるには有効かも知れな
いが、そのあとが不毛の地と化し
てしまう懼れが非常に多い。

このような方法でやる、短時
間できわめて優秀なクライミング
・マシンは出来あがるかも知れな
いが、そこから先はけつして優れた
マウンテンニヤールは生れて来ない
と思ふ。

登山技術がいかにすぐれてい
ても、ものを深く考える能力のない
人は、山に登るロボットと同然で
ある。重要なことは登山技術を教
えると同時に、各自の山に対する
考え方、ものの考え方を教え、き
びしくものを考える能力を確実に
身につけさせることだと思ふ。

ただ単に技術を教えるだけなら
ば、リーダーの優劣の差はさほど
問題にならないであろうし、極端
に言えばすぐれた技術を持ったコ
ーチャーがいれば、リーダーは不
要だともいえるだろうが、山に対
する考えとか、ものの考えなど内
面的な問題になって、はじめてそ
こにリーダーの優劣とか、重要性
というものが、大きく出てくるの
ではなからうか。

このためリーダー、中堅級の人
たちはより一層の勉強をまだま
だ考え方も甘いし、勉強も不十分
だと思ふ。このことは受講生ほか
りでなく大方の講師をも含めて、
もっともと本を読み、よく考
え、自分自身の内容を豊かにし
て、それを押し拡げる努力をしな
ければならないと思ふ。

所感

石川 森 孝雄

一、講習会の目的とその成果

本講習会は講習生各自が地方団
体のリーダー格となつて、本講習
会で修得した技術及び生活マナー
を各地方の初心者に伝達講習しな
ければならぬという特殊なもので
あるだけに、本部の方々の配慮は
細部にわたつて苦勞の多かつたこ
とと察せられた。我々として感謝
にたえない。

これに対し講習生自身、本部の
意図を十分に認識しない者が多か
つたのではないかと思ふ。

これは各県ともその選考方法が
まちまちで、厳密な代表選出を行
いえなかつたためと思ふ。これが
ため各県の講習生の技術や考え方
研究法の程度に隔差が見られ、
諸師団の方々にしてみれば指導方
法に困惑されたことと思ふ。

一方において、それがために各
講習生間において互いに技術や、
意見の交換によつて大いに得る所
があり、またコンプレックスを感
じたりもしたが、結果において教
科書や先輩から学び得ないものが
特に今回この講習会で得られた取
穫であつたように思われる。

今回も少し欲しかったのは各
県相互の交歓の機会である。講師
または講習生同志としてでなく、
じ同山仲間としての知り合いを多
く持たせたのである。

一、実技講習
これは本講習会のいわば「やま

ば」であつただけに期待も大き
く、また相当厳格な訓練に処する
決意をもつて来たのであるが、講
習生の人格を重んじてか少し手ぬ
るいという感じがした。自分自身
努力を怠つていながらこんなこと
を言えた義理ではないが、時間的
にも短かすぎるし、内容的にも相
当高度で厳しいものでよいだろう
と思ふ。二十三日など、天候も風
雪となつて技術訓練には絶好の
条件と思つていたのに、午前中
西穂へ登頂して帰つてきただけ
で終つてしまつた。講習会というの
は新しい技術を学び、それを後
によく繰返し練習することによつ
て自分のものとすべきであると思
ふので、一定量の講習以後は自分
自身の問題であると思ふ。

一、夜の講義
なに気なく話される言葉の端々
に本心に傾聴に値するものが多い
が、本講習会の意義の大きいこと
を改めて感じた。「確保論」につ
いて金坂一郎氏が来られなかった
のは非常に残念であつた。

二、講師について
二対一の割合で講師が配属され
たのはデラックスであり、単に技
術の指導者としてでなく、人間の
な体臭と共に自然に影響を受ける
ことは理想的なことである。

ただ直接指導される講師はつね
に同一なので、多少の個人差は避
け難く、事前に原則的なことだけ
でも打合せておいていただけたら
よかつたように思ふ。

本講習会参加者全員による感想文集、
および報告書が作られ、関係者に配布
された。



会員通信

上田哲農氏作

札幌通信

望月達夫

三月のはじめ会員渡辺公平氏、村尾金二氏が相次いで来札した際は、食事をもにしながら歓談にひと時を過すくらいしか時間の余裕がなかつたが、半ば過ぎに林和夫君がやってきたときは、来た方も時日にゆとりがあつたし、こちらも都合よく一緒にスキーに出かけることができた。

もっとも、二十日の朝から林君と一緒に橋本誠二君ら五人が奥手稲にでかけた際は、その前日チトカニウシへ行つてきたばかりの藤井運平君と僕は、休日でもないの午前中だけ店へ出て、午後から先行の連中のとを追求することにした。

数日來の暖気でくさってきた雪

も、朝からの新雪が丁度いい加減に手直しをして、シールをつけて登り出すと思つたよりいい。天狗の横をまいて尾根にたつと、雪はやんで青黒い石狩灣の向うに、暑寒別の山塊が幻のように光つて、えも言えず美しい。雪庇の張出した尾根を大体五〇〇m位の高さまで登つた頃、二人とも空腹をかんでパンを食べていたら、眼前の白樺林に人の気配がして、林君ら五人が「上はいい雪だつたよ！」の声と共に現われた。

三時半頃下りはじめ途中で遊んだりして、札幌国道から車で町へ戻つた。夜は橋本家のストゥヴを囲み、牛鍋をつつきながら時のたつのを忘れたが、僕らの話もこの頃は段々と思ひ出話や子供の話などが多くなつてきたのはいかんともしがたい。

翌二十一日は春分の日。この日に過去の山登りの思い出を持っていく人は多い筈だ。打合せ通り八時発豊羽元山行のバスに乗る。林、藤井君ら六名。橋本君はどうしても来られぬ用事があつて、代りに一人息子のトモちゃんを加わつた。あとから北大の現役と運平さんの友人W氏が一緒に八名となる。

天気は無類にいい。林君は珍ら

しく心がけが余程よかつたに違いない。定山溪の途中から、無意根の純白な姿、札幌岳、砥石山などがきれいだ。同行した中学時代からの友人H君と林は、三十年前の思い出を、こうした山を見ながら語り合つている。聞いていても、まことに愉しいものだ。

十時に豊羽元山口から無意根山へむかつて登りだす。一行の身が高まるにつれて、背後に余市岳、天狗、鳥帽子などの山々がせりあがつてきて、それらと前景のエゾマツ、トドマツとの取り合せが美しい。この見事な眺望は、千尺高地といわれる主尾根に辿りついたとき頂点に達した。遙かにニセコ連峰、後方羊蹄山が見える。去る二月下旬はじめて無意根に登つたときは、終日姿を現わさなかつたその頂きも、ゆつたり盛り上つた山容を見せていた。

どうせ頂上まで行く予定でなかつた僕たちは、ここでゆっくり弁当を開き、一時半まで東北側の粉雪の斜面で遊んで往路を下つた。その日の夕刻には東京行の飛行機にのるといふ林君らを、定山溪につれてゆき、一風呂あびてくつろいだあと、またチラついてきた雪の中を走る札幌行のバスのなかでではまた元気で会おうと夫々に別れたのだった。(一九六一・三月)

ビッグホワイト・ピーク隊便り

C2にて 梶本徳次郎

春暖元氣よくお越しのことと存じあげます。私どもの隊、カルカッタ、カトマンズではもたつきましたが、四月十五日B C(約四千米)着、翌日からすぐに登山をはじめました。いま好天続き(午後は雪、あられ)で、その間にできるだけ高くへ進みたいと頑張っています。隊員は高山病と疲れで交替で頭痛、これを卒業しないと頂上には着きません。昨二十一日C2とC3のトレースに登りはじめて頂上を真近く見ました。明二十三日は一隊がC3へ入り、二十六日ごろC4、二十九日天皇誕生日ごろにC5、頂上は五月五日―十五日ごろに登りつければよいと思います。大部隊(M13+S13)の隊長はなかなか気疲れ大変で、短気者もヒマラヤ相手では氣長になります。慢性の咳も治り、頭痛も少なくて、調子はよろしい方です。一年生には毎日が新しい発見です。(六一、四、二二金坂一郎あて)

ハ付記V 梶本隊は五月十三日頂上近くまで迫りながら、悪天候にはばまれて登頂を断念した。

帰国ごあいさつ

東京新聞社後援による私どものニュージールランド親善旅行につきましては、色々御力添えを載せましたが、お陰様で五月三日全員無事帰国いたしました。

私どもの行動は、既に東京新聞紙上で御存知のことと思ひますが、現地各団体の御助力を受け、クック山国立公園の山々に登り、各都市で日本紹介を行ない、両国の親善に努めてまいりました。尚、来たる五月十九日より二十三日まで、西武デパートでニュージールランド展を行ないます。どうぞごらん下さいませ。

右簡単ではございますが帰国の御挨拶を申し上げます。三十六年五月十日 日本ニュージールランド

女子親善隊

- 佐藤 テル
- 森 宏 子
- 後藤 董 子
- 川井 耿 子
- 田村 協 子

× × × × × × × ×

三月の大日岳

小林 智明

三月二十一日、飯豊連峯、大日岳に登頂いたしました。日出谷から上ノ峠を越え、長走川へ入り、長走の支流大面沢から蒸場山にとりつき鳥帽子、実川山、大日岳（郡境尾根）とたどりました。

四人で五日間の日程でしたが快適な雪山生活を送ることができました。

飯豊も今年は雪が多く、お彼岸だと言うのに日出谷の駅前から雪路を踏みました。長走（ナガバシリ）川とはほんとによくつけた名で、何とも言えぬ響きで流れる飯豊山中でも指折りの好い所です。

前進キャンプは高度一〇〇〇米稲葉ノ平という無の木森林限界附近に設けましたが、そこから大日岳まで往復十二時間、夜明け、すでに南の天にサソリ座を見る三月の山では、恰好なアルバイトでした。

三月の蔵王スキー行

安彦 六郎

蓼科の八子ヶ峰、奥日光とスキー行脚をつづけて、こんどは三月

十日、十二日、蔵王に行って参りました。蔵王はよい天候の日は少ないのですが、このたびは快晴に恵まれました。女性三名を加えた私たち一行は朝早く高湯を出発、ザンゲ坂下までリフトを使用し、それより徒歩で地蔵まで登る。

これよりアイスバーンのザンゲ坂を避けて、見事に発達した樹水群を縫って粉雪の斜面を快適に滑降を楽しみました。

これは一般スキーコースには入って居りませんが、ザンゲ坂下のリフトの終点に出られます。滑降を楽しみながら、さまざま樹水を觀賞したり、撮影等のためには最もよいコースとなりました。ただし晴天の日のみにかぎります。

カプールにて

崎田 照

その後ご無沙汰しております。スキーの件ではいろいろとお手数がかけてました。カラチからの転送が手間どって、まだ着かないので今シーズンには間に合いません。

が、来冬を楽しみにしています。それから山岳と会報を一度にごそりと入手しました。有難うございました。事務の方にその由お伝え下さい。

当地は標高一八〇〇mの高原で大層気候が良く、住居にはきわめてよい所です。

周りには四五〇〇mくらいの山もそびえ、残雪を望んで、いかは一度登ってみたいという意慾を感じています。

山岳会の諸氏によりしくお伝え下さい。（金坂一郎あて）

住所 V Hiroshi Sakia

c/o USOM/A, c/o American Embassy, Kabul, Afghanistan

知りたい旧会員の消息

藤島 玄

旧会員、中島治一郎氏（会員番号一三四一）は、戦前の名簿に横浜市磯子区平瀧町となっているので、照会したが判明しません。

このお方と思いますが、昭和九年かの山日記に、昭和八年越後駒が岳と中ノ岳の鞍部、天狗平に独力（自費）で避難小舎を建設しています。どういってお人か、どうして建てられたのか、その後どうされたか知りたく思います。

山岳刊行のお知らせ

山岳第五十五年（一九六〇年）が刊行された。本文一九四頁、写真四〇葉、地図九枚。英文梗概付。

出発ごあいさつ

拜啓、五月晴の空に鯉のぼりが勢よく流れるよい時候と相なりました。皆様の温いそして御理解ある御支援によりまして一橋大学山岳部の南米アンデス遠征は遂にその実を結ぶことができ、第一隊は三月十七日に、第二隊は四月二日に夫々横浜港より川崎汽船の昭川丸とキューバ丸にて、そして第三隊は五月九日に皆様の御声援をうけながら羽田空港より日本の地を離れることができました。

思いかえしてみますと、何かと気のつかなかったことも多くて、心ならずも色々失礼やら御迷惑をおかけしましたことと存じます

が、われわれの山岳部として、海外遠征は創立四十年以来最初のことでもございますので、右の数々の手違いは御許し願えれば幸いです。

われわれの目指すコルデイエラ・プランカのプカイルカ峰の攻撃は、日本隊と、イタリーのベルガモ隊とトリノ隊の三隊とが時期

が同じ関係で、たまたま競走の形になり、世界登山界の注目のうちに、六月下旬行われるものと存じますが、われわれは第一登という

ことのために実力以上の無理をすることは絶対に避け、極めて自然になだらかに行動を進めて参るつもりでございます。何と申しましても御期待に添うよう出来るだけのことをして、而も全員が元気で無事帰国することこそ、われわれの最大の使命かと考えている訳でございます。われわれの場合、成功とはそういうことではないかと考えております。

われわれにはプカイルカ峰の攻撃の他にもボリビヤのアポロパンバ山群における諸活動及び必ずしも容易とは思われない経済調査とがございますが、これ等を行うに際しまして、決して前記の原則を忘れることはできないのであります。

われわれは甚だ微力ではあります。然し、右三つの大目標は必ず果して帰国したいと心に誓っております。どうかこの上にも、御支援御指導賜りますようお願い申し上げます。

隊員全部の旅立ちを機会に略儀ながら書中を以て御礼芳々御挨拶申し上げます。

昭和三十六年五月九日

敬具

- 一橋大学山岳部長 関 恒義
- 同大学山岳部アンデス遠征委員長 中川孫一
- 同副委員長、隊長 吉沢一郎



図書紹介

上田 哲農 氏作

The Alpine Journal

Vol. LXV November 1960

No. 301

昨年のビッグ・クライムの一つであったアンナプルナII登頂の記事は、隊長J・O・M・ロバーツによって簡潔に述べられている。登頂されたのは五月十七日で、R・H・グラントとC・J・S・ボニントンの二隊員とアン・ニーマのトリオだった。なおロバーツは最後に、アンナプルナIIという山名は、マルシャンディ・ヒマールがいろいろではないかと言っているのは面白い説である。

ついでF・マライニが、一九五九年八月二十四日登頂されたヒンズー・クシュのサラグラール（七三四九m）の記録を述べている。この山は従来サド・イシュトラールと書かれていた山である。アン

ナプルナIIの写真が一枚もないのは惜しいが、この方には見事な写真が六枚も添えられている。
E・シプトンは依然活躍をつづけており、本号には南部パタゴニアへの二つの山行について述べ、珍らしい写真四枚を示している。

今年一橋の遠征隊も目標の一つに選んでいるアポロパンバへの一九五九年の山行が、W・H・メルボルンによって述べられ、五〇〇〇メートル級の山が幾つか登られたのを知る。ソラル・ピークを始め美しい氷峰であることが、挿入の写真によっても知られる。

アンナプルナIIの登頂者の一人ボニントンの筆になるトレ・チメ・ディ・ラヴアレドの北壁の登攀は、A・Jには珍らしいアクロバティックの岩登である。

そのほかに、戦後のスコットランドの冬期登山（T・W・ペイティ記）、ナイロビ付近の岩登りを述べたルケニヤ（J・W・ホワード記）、クレテの山（L・H・ハースト記）等が主な内容である。

エクスペディション欄では、最近逝去したピエロ・ギリオネのルウエンゾーリ山群アレクサンドラ峰西壁の登攀と、四人の日本のクライマーが一九六〇年五月六日マッキンリーに登頂した記事がわれわれの目をひく。

アルパイン・ノーツ欄は例によって興味深い記事に満たされていて、一つ一つ挙げたらきりがなが、かのロングスタッフ翁が会員在籍六十年に達したという事項は特に記しておきたい。それに続いてチリ、東アフリカ、ヒマラヤ、ニュージラランド、北アメリカなどのノーツが収められている。ヒマラン・ノーツには日本のヒマルチュリとアピの登頂が、またニュージラランド・ノーツには日本山岳会副会長松方三郎氏の訪問と、近く五人の日本女性登山家の訪れが記されている。

追憶欄にはマロリーやG・W・ヤングの友人であり、マロリーの回想録を書いたことで知られているD・R・パイの追憶がある。本文一三三頁、写真三五葉。（望月達夫）

登頂ヒマルチュリ

山田 二郎 著

一九六〇年五月二十四日、二十五日の二回にわたりヒマルチュリの登頂に成功した慶応隊の記録を隊長の山田氏が語ったのが本書である。内容は、計画の生い立ち、ヒマルチュリを見る日、ヒマルチュリに挑む、決断とタイミング、

栄光の陰にあるもの、の五章に分れ、さらにそれぞれに小見出しがついていて、別に巻末に登山隊の日誌とヒマルチュリ登山年譜がつけられ、巻頭には前年この山に挑んで登頂成らなかった村木潤次郎氏の序文がついている。

全体を一読して感じたことは、矢張り充分読みごたえのあるものだったということである。取り扱われているのがヒマラヤでも指折りの峻峰ヒマルチュリの初登頂だから、ヒマラヤに関心を寄せる者に面白くない筈は無論ないのだが、この本の場合とくによく書けているのは前半、即ちヒマルチュリに登るまでの記述である。

それに反し実際の登山にかかってからは、分量にしても本書の約半分で、前半との釣合いも、もう少し詳しく書いてほしかった。とくに第一登だけを述べ、第二登については殆んど述べていないし、下山のくだりも省略されているのは惜しい。おそらく出版社側からせきたられ、多忙な著者がやむなく後半を端しよつたか、或いは全体の分量に制限を加えられたかしたのではないかと想像する。

著者は本書の「あとがき」で、正式報告は「登高山」に発表される筈と書いているが、その場合に

は、実際の登攀の部分で本書に書き足りない点を十二分に書いてほしいと思う。この著者のように現代最も実力ある人の記述が、最も望まれているものと思うからである。

B6版二一八頁、写真二十三葉
一九六一年二月毎日新聞社発行
定価三二〇円（望月達夫）

北八ツ彷徨

山口 耀 久 著

八ヶ岳の北に蓼科山まで延々と続く山波のことを、北八ツというようになったのは、それ程古いことではあるまい。そこは南八ツとは異り、荒々しい岩稜のかわりに苔むした森林、明るい草原、池沼などに恵まれ、すぐ近くの奥秩父ともかわった雰囲気をもっている。

本書の著者は、この地域にうちこみ、今までの誰よりも、この山域のたくみな風物詩を本書によって示した。しかも、本書に含まれている「雪と風の日記」を見てもわかるように、この著者の登り方はただ静かな山歩きというものだけではない。収められた各篇は、曾て「アルプ」その他に載せられたものだが、収録にあたって著者の細かい心づかいが行きわたった

せいか、みがきのかかった文章と相まって、北八ツの自然とそのニュアンスを伝えるのに成功している。近來の好著と言ってさしつかえない。

なお、本書もその一つである「アルプ選書」には、前に会員串田孫一氏の『董色の時間』など四冊が刊行されていて、どれもすっきりした出来栄である。すこやかな発展を望みたい。

変B6版二五四頁、写真四葉、一九六〇年十二月 創文社刊行 定価二八〇円 (望月達夫)

山毛樺叢書

(加藤武三著)

広島山の会刊行

第1集 広島をめぐる山と谷 (登山とハイキング)

第2集 芸北山群

第3集 焚火(随想集)

第4集 スキーツアーコース (スキー場案内)

第5集 ひろしまをめぐるハイキング20コース

第6集 広島をめぐるキャンパス

イト

(新書版、一〇三種×一八五種)

このシリーズの著者、加藤武三氏は、第1集の前書きで「私の故郷、広島を繞る山々は標高も低くそれに規模の小さい山が多い。中

部の高峻山岳を歩いていると、なんとしても誇るべき特徴を郷土の山の中に見出すことが出来ぬようである。しかし、その低い藪の多い山を歩くこと茲に二十年近く、もう歩くのもあきてしまふかと思

いの外、不思議にも思慕の情はつゝのるばかり(中略)この貧しい案内書を、私のように山を愛する友の前に捧げたいと祈念した所以は、過去に於て、まだ纏った案内書を一冊もない為に、しばしば山々の状況を訊かれることが多くな

るにつれて、是非何とかしなければならぬと考えた為にもよるが、私の愛する故郷の山々を、もっと多くの人に知って頂きたい為であった。(旧版の序より)と述べて

いる。 × × ×

このシリーズは一九四八年に第1集が出た。その後改訂を加えながら、すでに第6集まで発刊されている。地方都市を中心とした山のガイド・ブックで、これだけ詳細で(挿図も豊富である)携帯に便利よくまとめられた案内書の揃っているところは少ないと思う。

これは著者の並々ならぬ郷土愛によることは勿論であるが、また昭和初年に広島山岳会が創立され、伊藤胖、町井剛、結城次郎、磯貝勇(現本会会員)などの各氏

によって開拓されていった登山熱の集積にもよるものと思われる。なお広島市に於ける登山熱の勃

興には、旧RCCの水野祥太郎氏の岩国市在住や、短期間ではあったが吉沢一郎氏の広島市在勤などもそれぞれ寄与される処が多かつたことは記憶されてよい。

現在、呉線沿線の天応の岩場にはクライマーが集まり、ルート図まで作製されているということがあるが、ザイルの扱い方など岩登りの初歩を、当時登山の芽生えの人々(水野氏の言による)に手ほどきをされたのは水野祥太郎氏であった。 × × ×

話は余談に亘ったが、本シリーズ中の異色は、随想集「焚火」である。これは案内記ではない。初

版は昭和十六年に著者の出征中に上梓されたが、戦火に焼きつくされてわずかに二冊残ったものを、戦後に再版して、このシリーズに加えたのである。中国地方の山を知らぬ人には、これはやゝ感傷的にすぎると思われるかもしれないが、ここにはき

わめて純粹で美しい静観的な山歩きが、著者の愛好する芸北山群の

素朴で地味な美しさと透き滲った

空気の流れ——山里を背景にして述べられているのである。例えば、「それは君も知る如く、小さな山歩きであった。それらは何処にもある簡単な山歩きに過ぎな

かった。然し私が教えられたものは、山の大小と、形態の如何には関係のない、愛すると云うことの

美しさとその深さであった。私をして名譽を捨てさせ、功名を捨てさせ、ひたすらに瞑想させてくれた山々を、私は芸北の蒼い山波の中に見出すのである」と。そして、著者はこうも言っている。岩登りに優れた或登山家が、岩登りこそ登山の出発点であると主張した。何故なら岩登りの持つ

バランスとリズムは、登山の根本に相違ないからだ。低山跋涉に言い知れぬ歓喜あり

と言うある静観的登山家は、平地の歩法こそバランスとリズムの根元があると説いた。兩者とも真実であろう。然し、此対立するかに見える二者の言

は、その拠って来る所を考えれば、これは単なる言葉の対立に過ぎないのでないか」と。

以上で書中の引用は終りたいと思う。が、著者は今後もこんな、所謂「小さな山歩き」を続けたいと言っている。そして尚「私の知

らない美しい峠や、高原や、頂きがあるに違いない広島山々の歩き続けたい」と念願しているのである。

おそろくこの叢書も、それによる今後ますますその内容を充実させて行くことだろうと思う。 × × ×

老年期の、そして花崗岩の山々——それに、これは他県に於ては味わえぬ瀬戸内の島々の、船路をともなった山々の案内記までも含めて、まことにユニークな叢書であると云ってよい。今後の充実をさらに期待したい。ただ望蜀を言わせて貰うなら、

県境山脈については、他県側の登路にもっと説明を加えて欲しい

た。石見から安芸、備後から出雲へと、山間を縫って往く山旅は、中国地方の山の最も楽しいワンダリングだと思ふからである。(F)



ハカットV 中国地方の輪かん。ツメがないのが特色。木製書より転載。



佐藤久一朗氏作

会務報告

四月理事・評議員会

六日・ルーム

▽日高会長、三田副会長、理事折井、太田、山崎、金坂、日下田、田村、木下、川上、徳久、監事野口、評議員藤島(敏)、神谷、青木、深田、織内、津田関西支部長高山信濃支部長、織田山陰支部長高木

委任出席 渡辺、古沢、加藤、望月、交野、今西(寿)、藤島(玄)、池田、藤木

▽議事

①通常総会について (折井常務理事)

・役員改選は、本年度は理事および監事一名についてのみに行う。現理事加藤元一氏は東京支部委員に転出、新理事としてつぎの二氏を推せんしたい。

中島伊平氏(会員番号四四六〇 前東京支部委員、京大OB)

田辺 寿氏(会員番号四六一八)

ヒマルチュリ隊員、慶大OB)

・山岳会ルーム移転に伴ない会費増額と基金設定の件とを緊急議題とした。

・役員は総会に必ず出席のこと

②山形支部主催、冬山講習会(蔵王山)について

・渡辺常務理事が出席した

③ジャン・フランコ夫妻五月来日予定について(折井常務理事)

・二週間滞日の予定でマカル、ジャヌーの映画講演会を開く予定

④東海支部設立について (山崎常務理事)

・発起人、須賀太郎、跡部昌三、伊藤忠雄、篠田公平、石岡繁雄

・支部長、須賀太郎、副支部長、石岡繁雄

・支部構成地域、愛知、岐阜、三重

・設立発会式、四月二十三日(十五頁、報告記事参照)

⑤関西支部総会について (津田関西支部長)

・五月十七日か二十三日の予定、本部から一、二名出席を願いたい。

⑥上高地案内人組合小屋譲受について (折井常務理事)

・松本営林署へ申請書提出中、近く許可になる予定、建坪二十一坪

⑦第二次登山技術指導者講習会に

ついて (日下田理事)

・西穂高周辺、(六、七頁報告参照)

⑧辻村太郎名と会員より本州山地の水河堆積物研究について提案。

・誰か研究の仲介者がたち、日本山岳会として研究してみたら如何

⑨雪崩の埋没についての発見方法について (織田山陰支部長)

・トランジスタラジオ使用による埋没者の発見、雪中深さ2m、範囲20m以内なら発見可能、ラジオ山陰、野坂技術部長考案。

一九六一年

通常会員総会

四月二十二日(土)午後二時より 体協会議室に於て開催された。

議長 日高会長。

次第

- 一、会長挨拶
 - 二、一九六〇年度事業報告 折井理事
 - 三、各支部の報告 各支部長
 - 四、一九六〇年度決算報告及び一九六一年度予算付議 太田理事
 - 五、理事改選の件 折井理事
 - 六、閉会の辞 折井理事
- ▽各議事は凡て満場一致を以て可決されたが、緊急動議として神谷

評議員より、ここ二、三年中には

体協も東京オリンピックに備えて

新築されることに決定したについて

は現在、本会のルームも他に適

当の場所に移転の要あり、其他各

種事業を企画実行するについて

も、五百万円程度の基金を持つ必

要があるので具体的な計画を推進

しては如何との提案あり、これを

可決した。

尚四月二十三日東海支部の設立

総会が名古屋に於て開催されること

一九六一年度理事

会長 日高信六郎

副会長 松方三郎

三田幸夫

常務理事 渡辺公平(山日記)

濱野正男(企画、支部)

折井健一(総務)

山崎安治(山岳指導)

太田 敬(経理)

川上 隆(総務集会)

理事 金坂一郎(指導)

木下是雄(調査研究)

村木潤次郎(海外登山)

徳久球雄(図書)

高橋 進(指導)

日下田 実(指導)

田村扇一(調査研究)

中島伊平(集會経理)

田辺 寿(指導)

古沢 肇(会報)

なお監事一名は、野口末延氏を

再選、評議員については本年度は

改選を行わない。

会費の納入についてお願い

前年度会費未納の方が相当数あり、会の運営に多大の支障を来たして居ります。至急お払込み下さるようお願いいたします。

昭和35年度収支決算表

35.4.1~36.3.31

科 目	収 入 の 部		予算に対する 決算増減	科 目	支 出 の 部		予算に対する 決算増減
	予 算	決 算			予 算	決 算	
経常収入	1,370,000	1,322,800	△ 47,200	事務費	646,000	706,144	△ 60,144
入会金	70,000	218,300	148,300	俸給	240,000	229,500	10,500
会費	1,300,000	874,100	△ 425,900	文具費	26,000	22,771	3,229
旧会費		182,600	182,600	印刷費	100,000	109,953	△ 9,953
次年度会費		47,800	47,800	通信費	260,000	324,276	△ 64,276
事業収益	737,000	1,020,260	283,260	交通費	20,000	19,644	356
会報広告料	35,000	30,240	△ 4,760	管理費	213,000	146,073	66,927
山岳広告料	150,000	100,000	△ 50,000	火災保険料	17,000	9,000	8,000
山日記 a/c	250,000	284,199	34,199	営繕費	70,000	8,935	61,065
会員章売上	7,000	2,830	△ 4,168	諸税組合費	21,000	26,150	△ 5,150
山岳売上金	20,000	21,240	1,240	光熱費	40,000	35,967	4,033
利息	65,000	80,742	15,742	電話料	65,000	66,021	△ 1,021
雑収上	70,000	56,682	13,318	事業費	1,248,000	1,580,444	△ 332,444
寄附金		3,200	3,200	会議費	50,000	32,267	17,733
貸室料	15,000	22,125	7,125	交際費	40,000	19,056	20,944
体協補助金	125,000	400,000	275,000	図書費	25,000	28,970	△ 3,970
マナスル売上		19,000	19,000	会報出版費	200,000	183,937	16,063
				山岳出版費	400,000	641,876	△ 241,876
				調査研究費	50,000	38,120	11,880
				備品費	25,000	144,415	△ 119,415
				指導費	225,000	459,989	△ 234,989
				予備費	193,000		193,000
				雑費	40,000	31,709	8,291
				振替手数料		105	△ 105
合 計	2,107,000	2,343,060	236,060	合 計	2,107,000	2,432,661	325,661
不 足 金		89,601					
		2,432,661					

社団法人日本山岳会、昭和35年度収支決算表及財産目録につき監査しましたところ其の正確なることを承認致します
 昭和36年3月31日 会計監事 野口 末延 同上 松本熊次郎

財 産 目 録		
基本財産	金 額	備 考
貸付信託	100,000	36.3.31.現在
運用財産	金 額	備 考
建 物	600,000	36.3.31.現在
什器備品	300,000	
図 書	650,000	
銀行予金	446,092	
貸付信託	590,000	
金銭信託	45,063	
振替貯金	60,043	
現 金	27,840	
計	2,719,038	
総 計	2,819,038	
基 金	金 額	備 考
遭難対策基金	54,375	上記予金の中
図書基金	10,450	
図書室基金	101,200	
計	166,025	

昭和36年度収支予算案			
収 入		支 出	
科 目	金 額	科 目	金 額
経常収入	1,460,000	事務費	771,000
入会金	160,000	俸給	250,000
会費	1,300,000	文具費	27,000
		印刷費	120,000
		通信費	350,000
		交通費	24,000
事業収益	637,000	管理費	161,000
山岳広告料	150,000	火災保険料	10,000
会報広告料	35,000	営繕組合費	20,000
山日記 a/c	270,000	諸税組合費	27,000
会員章売上	27,000	光熱費	37,000
貸室料	25,000	電話料	67,000
利息	80,000	事業費	1,565,000
雑収入	50,000	会議費	50,000
		交際費	30,000
		図書費	100,000
		会報出版費	180,000
		山岳出版費	500,000
		調査研究費	50,000
		備品費	25,000
		指導費	500,000
		予備費	90,000
		雑費	40,000
体協補助金	400,000	振替手数料	
合 計	2,497,000	合 計	2,497,000

五月理事会

十日ルーム

▽日高会長、松方副会長、理事折井、山崎、金坂、日下田、中島、木下、田村、徳久、高橋、古沢、監事野口、辰沼、片桐

▽議事

①本年度理事の業務分担について
 ・古沢理事より発言あり、会報発行は会の主要業務の一つであり、即報性を最も要求されるものであるから、発行を早めるように一層改善の必要がある。またその業務の性質上、絶え間ない繁雑さから長期の奉仕は到底不可能であり至急後継者の養成を考えて欲しい。
 ②山岳会ルーム移転について
 ・本年中に移転せねばならぬ事情にあり、現在移転候補として公園、貸ビルを物色しているが、なお慎重考慮を要するので左記の各氏を移転に関する実行委員として依頼し、委員会を開いて検討、実行に移す。
 ○会長、副会長、浜野、折井、松本、交野、太田、石原、神谷、藤島、野口、松田、竹田 以上14名
 ③北大ヒマラヤ遠征について
 ・現在英国隊が登山中のカンデロバ・ヒマールに対し一九六二年度に遠征を計画申中(外貨は来年度を申請の予定)

④秩父宮記念学術振興会について
 ・登山に関する部門のうち学術研究の対象となる分野で功績のあった者を毎年一名宛推薦し学術振興賞を贈る、その推薦人事を山岳会が依頼された。
 ⑤東海支部設立について
 ・愛知、三重、岐阜三県の全員五十二名が須賀太郎氏他四名の発起人をもって四月二十三日、名古屋大学医学部に於て設立をみた。本部からは日高会長、織内、山崎常務理事、津田関西支部長が出席した。
 ⑥富士山頂の医学研究に関する予算計上について
 ⑦昭和三十六年度高校登山技術講習会について
 ・実行委員、片桐、高橋、菊島、徳久
 なお講習内容その他の細目については登山技術研究委員会において決定する。
 ⑧文部省主催、登山講習会について
 ・年二回開催の予定、今年度第一回は七月十一日〜十四日、場所、岐阜県蒲田温泉、講師は岳連、ならびに本会より五名づつ派遣。
 ⑨信濃支部主催、登山技術講習会について報告
 ・期日五月二〜五日、場所岳沢、受講者八十名、折井、西川の両名が講師として参加した。
 ⑩青森県山岳連盟主催、登山講習会について報告
 ・期日、五月二日〜六日、場所八甲田山、金坂、日下田、高橋、片桐が講師として参加した。
 ⑪ウェストン祭について
 ・信濃支部主催、六月三〜四日、上高地碑前に於て行行。多数参加をお願いしたい。
 ⑫ジャン・フランコ氏来日は中止された。
 ⑬東京外語大、外モンゴル遠征計画は中止された。
 ⑭静岡支部長大室氏辞任に伴ない、同氏送別会に本部役員の出席方依頼について
 ⑮スポーツ振興法期成大会出席報告(日高会長)

木暮碑・建設精算書

昨秋、甲州金山に新たに移転建設された木暮理太郎翁の碑の精算明細書が、木暮碑委員会(甲府市商工観光課)から報告された。

科目	金額(円)
収入の部	
補助金	100,000
助成金	319,800
個人寄付	252
個人団体計	49
支出の部	
事務費	51,898
事業費	177,181
雑費	113,400
雑費	342,479
収入支出差引	77,321

なお、残余金は今後碑前の環境整備及木暮祭等の経費の一部に充当させて頂きたい(三六、五)

東京支部総会報告

一九六一年度東京支部総会を四月二十二日(土)午後一時半より御茶ノ水日本体協会議室で開催。開会の辞 折井 健一
 一九六〇年度事業報告 野田 三郎
 一九六〇年度決算報告及び一九六一年度予算案付議 宇田川允敏
 役員改選 神谷 恭
 閉会の辞 折井 健一
 尚議事は全議題満場一致可決された。

支部長 松方三部
 委員 折井 健一 坂倉登喜子
 安彦 六郎 野田 三郎
 三枝 礼子 西川 益生
 山口 節子 宇田川允敏
 朝倉 宏 芳賀 孝郎
 佐藤 安男 篠原 敏弘
 大屋 健二 芳野 越夫
 加藤 元一 中 保
 岩佐 吉雄 関口 周也
 石原 憲治 山下 一夫
 監事 決算報告並びに予算は別紙の通りであります。(野田三郎記)

昭和35年度決算報告 日本山岳会東京支部

科目	35年度予算	35年度決算	摘要
収入の部			
前年度繰越金	67,781	67,781	
支部会費	50,000	46,300	463人×¥100
事業収入	0	2,085	ヨーデルを聞く会々費
雑収入	0	200	
計	117,781	116,366	
支出の部			
事業費	30,000	13,034	{スキー講習会他補助 ヨーデルを聞く会他
山小屋建設準備金	0	50,000	
交通通信費	12,600	12,474	
会議費	2,500	2,992	新年度役員総会他
本部庶務分担金	15,000	12,000	
雑繰準備金	2,681	180	
繰越準備金	55,000	25,686	
計	117,781	116,366	

科目	収入の部	支出の部	計
前年度繰越金	25,686		
事業収入	70,000		
支部会費	50,000		
計	145,686		
		業務費	105,100
		通信費	20,000
		雑費	5,586
		雑費	15,000
		備付金	145,686

東京支部報告

三月一日役員総会

①山田温泉スキー講習会報告

②今後のスキー講習会の在り方

③三十六年度役員の内

④三月会員集会の件(十五日、会員のスライド8ミリ映写)

⑤三月懇親スキー、ツア一の件(十九、二十一日、吾妻山)

⑥新年度総会開催の件(四月二十二日、於体協) 以上

三月懇親山行

三月十九(二十一日)泊三日)吾妻連峯で山スキーを楽しみました。高湯のおひげさんの家を根拠地として、第一日は賽の河原までトレーニング、帰りは防火線づたいに玉子湯に下る、杉の林間コースは実に快適でした。第二日は快晴で、春の陽光を浴びつつ家形山に登り、五色沼をながめて大休止、帰りは一気に滑降にうつる。賽の河原で大休止をとり、昨日のコースを下った。この日は雪質が悪かったけれど、本日に山スキーを楽しんだ気持ちになりました。

五月懇親山行報告

安彦 六郎 (中保)

五月二十一日、前夜発でエーデルワイス・クラブと合同で車坂、籠ノ登山の懇親登山を行った。シャクナゲの花の群落と、新緑に美しいカラマツの林内を、ヤマザクラの淡紅色の花がこかしこに咲き揃い、一同静かな山をたんのうして帰った。

東海支部設立

日本山岳会東海支部設立総会は昭和三十六年四月二十三日午前十一時から名古屋大学医学部共済組合会館で開かれた。本部から日高会長、織内評議員、山崎常務理事および津田関西支部長が出席、愛知、三重、岐阜三県から集まった会員二十六名が参集。須賀太郎氏より發起人代表挨拶、石岡繁雄氏より支部設立総会にいたる経過報告があり、ついで支部規約案審議に移り、原案通り承認。終つて役員選出で須賀太郎支部長以下別項のとおり部役員を決定した。

終つて須賀支部長の挨拶、本年度事業計画および収支予算案審議も原案通り承認、ここに新しく日本山岳会第十七番目の支部として東海支部が目度く誕生した。午後二時から医学部講堂で東海

支部設立記念講演と映画の会があり、東海支部設立について(津田周二)登山随想(日高信六郎)最近の登山界の動向(山崎安治)の講演後、日映新社「地底の凱歌」毎日新聞「慶大ヒマルチュリ登頂」の映画が上映された。

東海支部役員

支部長 須賀太郎、副支部長 石岡繁雄、会計監事 鈴木真吾、磯村忠元、常務委員 高橋達雄、中世古隆司、石原国利、委員 加藤幸彦、二村嘉彦、鈴木重彦。

出席者

日高信六郎、織内信彦、山崎安治、津田周二、八木道三、柴山乙彦、中村慶蔵、永田弘、跡部昌三、神谷真吾、塩田良伸、高村輝行、石岡繁雄、永石良元、梶川晃平、樋口清明、柴田篤志、村井喜一、鈴木真吾、二村嘉彦、竹内博美、磯村忠元、中世古隆司、加藤幸彦、高井利恭、一柳政右エ門、大口瑛司、須賀太郎、熊田宗次、鈴木重彦、名古屋山岳会、柴崎陸奥夫

日本山岳会東海支部規約

第一章 総則

第一条 本支部は、日本山岳会東海支部という。(ただし、当該地域を愛知、岐阜、三重の三県とする)

第二条 本支部の事務所は、名古屋市中におく。

第二章 目的および事業

第三条 本支部の目的は、東海地方において、日本山岳会定款第三条に定める活動を行なうものとする。

第四条 本支部は、前条の目的を達するため、次の事業を行なう。

一 登山に関する指導ならびに研究

二 登山事故防止に関する啓蒙

三 海外登山の研究

四 支部機関紙の発行

五 目的を同じくする他の団体との連絡および協力

六 その他本支部の目的達成に必要なと認める各般の事業

第三章 会員

第五条 本支部の会員は、次のとおりとする。

一 通常会員 日本山岳会会員であつて、本支部の目的に賛同し、本支部の定める会費を納める個人または団体

二 支部名誉会員 日本山岳会会員であつて、本支部に対し特に功勞のあつた者の中から、委員会が推薦した者

第六条 会員にならうとする者は、入会申込書をそえて役員に申出で、委員会の承認を受けなければならない

第七条 会員は、日本山岳会定款第九条に該当したとき、その資格を失しなう。

第八条 会員が本支部から退会しようとするときは、支部長に退会届を提出しなければならない。

第九条 会員が次の各号の一に該当するときは、総会の議決を経てこれを除名することができる。

一 会費の支払を滞納したとき

二 本支部の名誉を傷けたとき

第四章 役員

第十条 本支部には次の役員をおく。

支部長 一名

副支部長 一名

委員 若干名(内常務委員二名以上)

会計監事 二名

第十一条 役員は、会員のうちから総会がこれを選挙する。

第十二条 役員により常務委員を選出する。

第十三条 役員は、互選により常務委員を選出する。

第十四条 役員は、本支部の業務を総理し、本支部を代表する。

第十五条 支部長は支部長を補佐し、支部長に事故あるときはこれを代行する。

第十六条 常務委員は、総会および委員会の決議にもとずき、本支部の業務を執行する。

第十七条 委員は、委員会を構成し、本支部の業務について審議する。

第十八条 会計監事は、審議会を監査し、毎年総会に報告する。

第十九条 役員は、総会に報告する。

第二十条 役員は、再任を妨げない。

第二十一条 支部長および副支部長 三年

その他の役員 一年

第五章 会 議

第十二条 本支部には、総会の議決により、支部顧問若干名をおくことができる。

決議とする。

第十六条 委員会は、毎年二回支部長がこれを招集する。ただし、支部長が必要と認めた場合、または、委員現在数の三分の一から請求のあつた場合には、支部長は、臨時の委員会を招集しなければならない。

委員会の議長は、支部長とする。

第十七条 委員会は、委員現在数の三分の二以上が出席しなければ議事を開き議決することができない。ただし、当該議事について書面をもつて、あらかじめ意思を表示したものは、出席者とみなす。

委員会の議事は、出席委員の過半数をもつて決議し、可否同数のときは議長の決するところによる。

第十八条 通常総会は、毎年一回会計年度終了後二月以内に支部長がこれを招集する。

ただし支部長、委員会、監事が必要と認めるとき、または会員現在数の三分の一から請求のあつた場合には支部長は、臨時総会を招集しなければならない。

通常総会の議長は、支部長とし、臨時総会の議長は、会議のつど会員の互選で定める。

第十九条 次の事項は、通常総会に提出してその承認をうけなければならない。

- 一 事業計画および収支予算に関する事項
- 二 事業報告および収支決算に関する事項
- 三 その他委員会で必要と認められた事項

項

第二十条 総会は、会員現在数の二分の一以上が出席しなければ、その議事を開き、議決することができない。ただし、当該議事について書面をもつて、あらかじめ意思を表示したものは出席者とみなす。

総会の議事は、この規約上別段の定めがある事項を除くほか、出席者の過半数をもつて決し、可否同数のときは議長の決するところによる。

第六章 資産および会計

第二十一条 本支部の事業遂行に要する費用は、会費、寄附金、事業に伴う収入および資産から生ずる果実等をもつて支弁する。

第二十二条 本支部の会費は、年三百円とする。

第二十三条 本支部の会計年度は、毎年四月一日に始まり、翌年三月三十一日に終る。

第七章 規約の変更ならびに解散

第二十四条 本規約は、総会において出席者の三分の二以上の議決を経なければ変更することができない。

第二十五条 本支部の解散は、会員現在数の三分の二以上の同意を必要とする。

附 則

この規約は、昭和三十六年四月二十三日から、これを施行する。

青森県山岳連盟

雪上技術講習会

五月三、六日の四日間、八甲田山酸カ湯付近で青森県山岳連盟主催の雪上技術講習会が行われた。受講者六十名、内三十名は高校生である。本会より講師として片桐理一郎、高橋進、日下田実、金坂一郎の四氏が招待された。

自衛隊の協力により、酸カ湯近くの雪原にキャンプが設置され、サーカスのような大きなテントでのびのびと生活する。しかし天候には恵まれず、入山日を除いては雨に降られつづけという不運で、また雪量少なく、適当な練習場を見つかるのに苦心した。

予定された講習内容は、積雪期の北アルプスあたりで使われるテクニクの習得である。青森県の岳人については、登山が県内に限られれば、高度の技術はあまり必要としない。だから県外遠征のための技術に主力を注ぐのは適切ではない。こうした観点から、技術練習は堅雪斜面の歩行を主とし、これにアンザイレン、確保の概略を修得することにし、ことに高校生の場合には、キック・ステップ及びその関連課題に限った。単なるデモンストレーションで

はなく、何らかの技術を身につけて頂くためには、こうした基本的な問題に限らざるをえないし、またこうすることにより、登山の基礎に対する考え方というものも見て頂けるわけである。

僅かな日数であるし、受講者に対する講師の数も少なく、大きな成果は初めから期待はしていなかったが、連日の悪天候にもかかわらず、受講者の熱意により、少なくとも講習科目については十分修得が達せられた。今後とも機会あるごとにトレーニングにつとめ、一層高き目標に近づかれんことを期待したい。最後に、こうした有意義な行事を実施された西田会長、作見常任理事、青森県岳連の幹部諸氏、これを積極的に支援された自衛隊に敬意を表して報告を終る。(金坂一郎記)

石川支部便り

森 孝雄氏(石川支部、学生部委員、金沢大学山岳部OB)は、母校山岳部の白山縦走計画応援のため入山中、白山五葉坂付近で、四月六日、遭難死亡された。二十才。今春三月、西穂で開かれた本会の第二次登山技術指導者講習会にも講習生として参加し、支部ではその急逝が惜しまれている。

信濃支部登山基礎技術講習会

毎年の恒例として続けられてきた講習会は今年も五月二、五日にかけて穂高岳岳沢に於て開催された。参加者は信濃支部員及び県下の高校山岳部員、実業団体山岳部員等八〇名の多数に達したが本年は特に東京支部からも樋口一男、小堤陽造君が参加させて貰い講師団にも折井、西川が参加した。

荒天にたゞられて実技としては、西穂高沢に於ての雪上技術の基礎だけであったが、テキストに依る登山技術の講習、座談会、反省会等で参加者の凡てが隔意のない意見を討議する等、終始和やかなそして真面目な気持のよい講習会であった。

高山支部長他役員の方々と参加者の岳人としての自覚もさること乍ら、参加者全員が食事当番、乾燥場当番等を受持つて、凡ての行事が雨天にもかかわらず、だれることなく時間も正確に且つ整然と実施されたのは、登山に於けるマナーとしても、またリーダーシップ、メンバーシップの点も勉強になったものと感じられた。

(折井健一)

第15回ウェストン祭

生誕百年を迎えた今年のウェストン祭は、美しく晴れ渡った新緑の上高地梓川畔のレリーフ前において、本会信濃支部主催により盛大に挙行された。

六月四日、午前十時、レリーフの前には遺愛のピッケルが飾られ、式は、本会信濃支部副支部長、清水悟朗氏の司会によりすめられ、献花の後、日高日本山岳会長、矢野眞観光課長、降旗松本市長、上条安曇村長、山陰支部（地方支部代表）佐野勇一氏らのあいさつがあり、尾崎喜八氏の詩の朗読（別掲）、エーデルワイスクラブの山の歌合唱（指導、平野修氏）があつて、午後は、木梨平セントラルロッジで記念講演会が催され、橋本三八、横内齋、日高信六郎、橋本竜伍、岡村精一、串田孫一、尾崎喜八、藤木九三、深田久弥、石田吟松（順不同）の各氏によってウェストン師を偲ぶ講演が行なわれた。（F）

× × × ×

ウェストン師の百年祭に

私たちが、山を愛するもがら、今年もまたこの神河内の谷へはいつて来て、今日、六月四日、午前十時、あなたの碑の前に集まっています。徒歩で徳本をこえて来たもの、車で梓川の谷をのぼつて来たもの、それぞれにたどる道こそ違ひはしても、あなたの古い踏みあとを懐かしみ、あなたの遺された徳をしのぶ心はひとつに、女、男、若い者、老いたる者の三百人あまりが花を捧げ、思い思いの瞑想にひたりながら、ここにこうして立つています。

耳にひびく梓川の谷の水音、木の間で歌いさえずる初夏の山の小鳥、柔らかな雲のような樹々の若葉や、おりから盛りの小梨の花やえぞむらさき。そしてこの美しく清らかな別天地を永遠にかくあれかしと護るように、今年はまだわけても残雪深い雄渾な穂高が、霞沢、六百、焼の峯々をしがえて、六月の空の中ほどに聳々とそぼだつています。

私たちがみんな、心が洗われ、

精神がのびのびとなつた気がします。

世の中に対してはもつと寛容に、思いやり多く、おのれに対してはなおいくらか厳密に、また一層有能でありたいという気がします。そう思うと

来る年ごとに少しずつ変るこの谷の有様や、軽薄になつてゆくかと思える風俗さえ、あまりきびしく咎める気にはなりません。それにしてはめぐる山々が高々と大らかに、谷の姿、原始林のたたずまいが、変ることなく深く重厚で、人をして各自の反省に沈ましめるからです。

私たちがみんな、明日はまためいめいのこの世の務めや営みに袂をわかつて帰つて行きます。そしてその私たちが、もしも世界に対して一層大らかに、寛容であり、かつ一層たのしく精勵する事ができるとしたら、それはやはり、山という自然の賜物であり、

同じ心の人と人との、こうした再会やめぐりあひのためでしょう。そしてそれは、必ずや、かつてこの世にあつた日の、あなたのお心にも添うことと思ひます。

一九六一年六月四日朝、神河内にて作る。

尾崎喜八

宮城支部報告

吉野 禎造

蔵王山（宮城側）登山道整備についてお知らせ。

日本道路公団では昭和三十五年度から有料登山道の拡張整備工事を施工しておりますが、本年五月一日より十一月三十日まで第二期工事のため左のように一般乗合自動車道のコースに一部変更がありますのでお知らせ致します。

▽遠刈田温泉——賽の河原間は三又路（岫々温泉への岐路）五万分ノ一地図上、澄川「不動滝」の「不」の字地点から折返し運転。三又路——賽の河原間徒歩約一時間。

▽遠刈田温泉——青根間は徒來通り運行。

▽青根温泉——岫々温泉間は六月三十日まで不通。

なおこの有料道路が本年一杯で完成致しますと、遠刈田温泉より刈田岳頂上附近まで自動車登山が出来ることになる訳ですが、これで静かな東北の山々の一つが又消えてゆくことは残念でなりません。（宮城支部常務委員）



高橋定昌氏作

会員の声

黒部平の渡船場に
ついで

冠 松次郎

大町からの通信によりますと、今夏の予定では、「平の渡し」を八月以降、つり橋の水没にともない、渡船の運行をするが、水位が渡船場施設に達するまでの間、渡船場への道路はかなり危険をともなうから、登山者へ充分注意するように警告してほしい、という連絡があり、なお「これについては関電側が責任をもって安全を期するのがほんとうだと思いますが、日本山岳会の方からも関電へ注意を促してほしいと思います」という意味の要望がありました。

× × ×

会報について

跡部 昌三

会報についてですが、会報は会のことを会員に知らせるのが役目ということですが、地方会員にあっては会が何を考え、何をしようとしているのか、このことは重大関心事であろうと思います。

会報ではそれが会務報告となって理事会などの記録が載っていますが、そのなかの議事の扱いはどうですか。これが標題(議事)の扱いがならんでいきます。なかには若干の意見が添加されていますけれど、これでは、ではどうなるかについてはなんにも知らされていません。議事の題目だけで終わっているものに、会員にとっては関心の深いものもありませんが、それがどうなるのか、どう処理されたのかもわからないものがあります。

そこで、これをどのように考えるか、どう処理するか、処理されたかの解説がほしいと思うのです。このことにもっとスペースを割いてほしいと思いますし、記事として読めるものにしたらと思っています。が如何でしょう。

(三六・五・二)

一つの提案

笠井 篤

信州の山奥に生れ育った私は何の因果か、山には恵まれない茨城県に住むようになってしまった。それでもささやかな職場のグループを作って山行を楽しんでいるものであるが、ここに支部組織もたない地方会員の悩みを訴え、そして提案したい。

会報二一二号の会員の声の中にもやはり地方会員の悩みがでていた。地方会員でもまだ支部組織のある所は、支部自体の活動に加わることもできよう。だが支部組織もたない地方会員は会員相互の連絡は勿論のこと、会とのつながりも殆んどなく、極端に云えば、唯会員であるというにすぎないのが現状だと思う。このような会員は全国でかなりの数にのぼっているのではないかと推察する。

私などは東京に比較的近いのではあるが、小集会等の通知を受けなくても時間的に無理であり残念ながら諦める、と云うことがしばしばである。しかしまだ東京へ出る機会もあり、利用しようと思えば図書館の利用も、又他の会員と顔を会わせる機会はまだもてる方であるが、これが東京から遠く離れ、し

かも支部組織もたない地方会員では全く孤立していると思う。唯隔月に発行される会報のみが唯一の会とのつながりを支えているだけだと思ふ。そこで提案したい。

会報を少くとも月一回の発行にその中に会員相互の連絡と親睦の場となるものを盛込んでいただきたい。さらに支部の活動状況等も今まであまり報告がないが、形式的なものでなく内容のあるものも今の会報の内容に加えて積極的にいれて欲しい。会報を通じて全国の会員相互、又会と有機的なつながりをもつことができるようにしていただきたい。会報に盛込むのが無理であるならば少くともそれに代るものと思う。編集者には大きな負担がかかることになると思うが、それもそれに見合う体制を整えることにより、かなりの解決はできると思う。

全国的に会員を擁しそれらの会員相互が有機的なつながりをもつことにより、それがピラミッドの底辺としてこそ始めて、頂点に輝かしい成果をもたらすことができるであろうし、又それが日本の山岳界の大きな底力ともなるのではないだろうか。御批判を仰ぎたい。

(三六・三・一五)

× × ×

アンデス通信(Ⅰ)

一橋大学アンデス遠征隊

隊長 吉沢一郎

南十字星の見える国ペルーへ遙々とやつて来ました。

第二便の船の到着がまた遅れ十九日か二十日に入るとのことです。それから通関があるので出発は早くても二十五日位になるのではないのでしょうか。

ワラスの方も今年は大奮闘らしいです。ブランカその他を合せると大変な遠征隊の数です。ペルーのリマの有力紙の一つエル・コンメルシオ(五月十五日付)によりますとわかつているのだけでも十一隊あります。

- (1)イタリー(トリノ)
- ・隊長ジウゼッペ、ディオニシオ・ブカイルカ。ツルパラワー。
- (2)イタリー(モンツァ)
- ・隊長ブルーノ、フェラーリオワイワツシュ。
- (3)ドイツ(ミュンヘン)
- ・隊長ホルルス、ヴェルスワイワシユの踏査。ピルカノート。
- (4)ドイツ(ウルム)
- ・隊長リヒアルト、ヘヒテル

ワスカラン。オクシヤバルカ。ウルタ。チヨピカルキ。

(5)日本(東京)

・隊長吉沢一郎
ブカイルカ。アポロバンバ

(6)日本(大阪)

・隊長川村大膳
ワスカラン。コヨリテ

(7)イギリス(オクスフォード)

・隊長 ?
カストロビレイナ。

(8)イギリス(ロンドン)

・隊長ピーター、ベリントン
ワイワシユ

(9)ブラジル(サン・ポロ)

・隊長ドミンゴ、ギオビ
カウヤラワー

(10)スペイン(バルセロナ)

・隊長ホセ、マヌエル、アングラ
ーダ。
アリコマ。ブランカ。

(11)アメリカ(アイオワ)

・隊長ジョン、エバート。
ワスカラン、

其他予想されるものとして

メキシコからマリアア、ゲワダ
ールペ、エルレーラ隊長(女子)
がワスカラへ他一隊。カリフォルニアのヘンリー・ケンデル

隊。アルゼンチンのマヌエル、
ブランコ、ヴェロ隊が入ること
なっています。

まあざつとこんな具合でワラス

(上高地みたいなところ)の混雑振りがわかるでしょう。

ワスカランには随分集つて来たようです。誰が新ルートで先に登るかわからないが、今年の最初が第十三登になるそうです。

次にペルーの山岳会なるものをお知らせします。

(1)アンデス・ブランカ山脈山岳会

・会員、五〇人(全部ペルー人)
・会長ホセ・パティノ(警察長官)
・会報リビスタ・ペルアナ・アン

デニスモ(二年に一回)

・編集長セサル・モラーレス。
アルナオ。

・住所ブラサ・デ・アルマス、ワ
ラス

(2)ペルー山岳会

・会員 二〇人(内リマ在任外国人
五名)

・会長ハリー・ローベルト・ステ
ルン。

・創立一九六一年

・会報ワラスの山岳会報と同じ、
住所コロン一七六、ミラフロ
レス、リマ

尚七月頃(六一年)ワンカイヨ

ーに支部が設置されることにな
つています。

大体以上のようなことです。J・
A・Cの皆様によく御伝え下
さい。(六一、五、一六、リマに
て、折井健一あて)



<斎藤健治氏 提供>

大阪大学ピーク29登
山隊、ホカラに到着

大阪大学山岳会のP29(七八三五メートル)登山隊は、ヒマル・チュリ西面のムシ・コラの谷を越め、四八〇〇メートルのコルを越えて、四月三十日主峰に面した氷河上にベース・キャンプを建設して、登頂路の偵察にとめていたが、急峻にして長大なアイス・フオールに前進をはばまれ、五月25日BC撤収、帰国の途につき、六月十日無事ホカラに到着した。なお篠田隊長の病氣は、快方に向い、六月二十六日午前零時四十五分、羽田着帰国された。

(二二四号訂正)

誤 正

1頁1段 学友会館 学友会館

同頁同段 ノシヤッ ノシヤッ

ク万才の 声がある

2頁2段 ヒマラヤ ヒマラヤ人

同頁5段 われわた われわれも

10頁3段 大阪大学 ピーク29登

10頁5段 関口正二 関口周也

11頁3段 新入会員 高橋達雄氏

同頁同段 高山忠四 高山忠四朗

編集後記

☆ランタンの事故突発のため、一部原稿を次号に送りました。☆編集という慣れない仕事をお引受けして一年すぎました。マンネリにおちないようにと思っていますが、お気付きの点をご指導下さい。

昭和三十六年六月二十五日発行

東京都千代田区

神田駿河台四ノ六

発行所 社団法人 日本山岳会

編集者 古 沢 肇

印刷所 株式会社 技報堂

電話 神田(03)八九五二番

振替口座東京四八二九番

振替口座赤坂溜池五番地

価値二十円